

研究報告

オールドオオツの景観情報学

龍谷大学工学部講師・里山学研究センター研究スタッフ

中川 晃成

里山学研究センターのこの5年間のプロジェクト『琵琶湖を中心とする循環型自然・社会・文化環境の総合研究』における自身の貢献をふりかえると、その研究内容の主要部分は景観情報学という言葉で表現できるように考える [1, 2, 3, 4]。ここでは、オールドオオツを対象にその概略を述べる。

オールドオオツとは、大津駅のあたりの大津市の中心部である区域をそのように呼称したものである。その街組みは近世大津町に由来し、都市計画の遂行により一部には破壊がもたらされているものの、いまでもよく保持されてきている（図aとbを比較）。オールドオオツの街区の成立は江戸初期にまでさかのぼる。慶長5（1600）年の関ヶ原の合戦の前日に終結した大津籠城戦を経て、その翌年に膳所に城が移ると、「宿場町」として変貌すべく、街場の拡張（逢坂学区）やもとの城内の再開発が直ちに進行した。大津に城が置かれていたのは、本能寺の変の後に坂本から移築のあった天正14（1586）年からのわずか15年ほどの期間である。しかし、この「城下町」時代に、オールドオオツの祖形（中央学区）はすでに形成されていた。それ以前は、戦国期である天文年間（1532-1555）に近江守護六角佐々木氏が大津壘なる城塞を築いたとの伝承が残る。その頃までは、三井寺の「門前町」としての性格（長等学区）が強かった。

このオールドオオツについて、都市の重要な構成要素のひとつとして河川に注目する。現在の津において、暗渠化されたり、流路が街の中心部から排除されたりして、オオツからは河川が巧妙に隠されてしまっている。こうした変則的な河川流路は、すでに元禄8（1695）年の大津町絵図に描かれていて、その起源はこの時代までは確実にさかのぼることができる。さらに伝承としては六角氏時代での移遷説がある。もちろんこの現流路は自然には作られ得ない人工流路であり、天文から慶長に渡るオールドオオツの成立期に、街区の形成にあわせ流路変更を受けた結果であることが想定される。

他方、オールドオオツのおおかたは、逢坂峠からの流下点を扇頂に湖岸にも達する非常に整った扇状地地形で覆われ（図c）、そのことがそこを貫くような河川がかつて存在したことを示す。この扇状地を作った河川こそ、現在は大津駅の駅裏を通り、県庁のまわりを目立たない形で迂回させられ、鳥ノ関駅の脇を小流として琵琶湖へ流れ下る吾妻川である。オールドオオツはそのほぼ全体がこの吾妻川扇状地の上に乗っていて、つまり、オールドオオツは吾妻川の作った大地の上に、吾妻川を排除して成立した町であると言える。

都市における河川の役割に関して、「環境における水の流れがまっとうであり、街の機能の中にその存在が正当に位置付けられている状態であることは、街にとってもその本来的要素のひとつなのではないか」[4] ということを述べた。都市河川が人工的な整備を受ける状態にあることはやむを得ない必然とは言え、それでもなおそこに、「命のうつわとしての河川」とし

で多様な命が健全な状態で在ることに配慮しつつ河川整備を行うことは可能であろう。

吾妻川の作った大地の上に吾妻川を排除して成立したオールドオオツにおいて、再び吾妻川を街の中心部に、ここに述べるような意味で再生復活させることを、景観情報学からの政策提言としたい。

図の作成には、国土地理院の基盤地図情報と、大津市歴史博物館のウェブサイトで閲覧に供されている史料を利用した。

- [1] 中川晃成 (2016) : 「琵琶湖湖岸線の変遷 — 烏丸半島とその周辺域の絵図・地図・空中写真—」 龍谷大学里山学研究センター 2015年度年次報告書, pp267-288.
- [2] 中川晃成 (2018) : 「近江国野洲郡の条里と荘園」 龍谷大学里山学研究センター 2017年度年次報告書, pp225-243.
- [3] 中川晃成 (2018) : 「近江愛知郡神崎郡の条里と古代愛知川流路」 牛尾洋也他編著『琵琶湖水域圏の可能性 里山学からの展望』 晃洋書房, pp111-122.
- [4] 中川晃成 (2019) : 「オールドオオツの歴史的諸相と地理的因子 — 川がながれ、街はまわら—」 龍谷大学里山学研究センター 2018年度年次報告書, pp261-290.



図 オールドオオツの街組み・水系と地形 (2100m四方)
a) 2014年 基盤地図情報の道路線・軌道線・水涯線
b) 明治7年 地籍図の道・川・湖岸のトレース
c) 2009年 基盤地図情報の数値標高モデルによる段彩図